

「透析患者のターミナルケア」

大 平 整 爾 著

メディカ出版

著者は医学生時代に母親の急性肝不全による死に遭遇し、それがきっかけで肝臓病の分野、特に肝臓移植に目を向けたとのことである。そして腹部外科の臨床の中で、術後急性腎不全に対する透析療法に手を広げざるをえない結果となったと記されている。また著者は後に日本透析医学会の理事長職を務め、さらには日本透析医会の副会長をも務め、この分野の専門家とされたことは周知のことである。さらに私の個人的記憶でも、不慮の事故で最愛の息子さんをも失うという辛い経験もされておられるはずである。

我が身に翻ってみると、自分が2年間の初期臨床研修（インターン制度をボイコットして）を修了して腎臓疾患を選択した動機でも、二十数年間の母親の腎疾患（腎結核で一側腎を摘出）が頭の片隅にあった。彼女は私が腎疾患の勉強のために新潟に住むようになったころ、最終的には慢性腎不全に至り、左前腕に内シヤントを形成して、数回の血液透析を自分の息子の手で受ける結果となった。しかし、導入後短期間にして思いもよらぬCVDにて死亡した。その時点での私はきわめて覚めた目でその死に立会い、さらには病理解剖にも立ち会った。その頃までに臨床医としてすでに二十数年も経過しており、肉親の死に向き合っても、恐ろしいことにそれが特別なものであるとの観念が希薄なままでいられる自分に驚いたものである。

そこで話を戻すと、長期間に亘り同じ腎疾患（特に透析治療の部分では一致する）患者を対象とする医療現場に身を置きながらも、自分と著者との決定的な違いはどこにあるのだろうか。それは母親の急性肝不全死や息子さんの事故死を深くしっかりと受け止め、日常の臨床の場（患者の生死をも含めて）でもいろん

なことを常に深く考察し続けて来たところにあると言えそうである。

それらを「命のとらえかた」「終末期をめぐる患者・家族・医療者のこころ」「終末期における治療」「医療者としての考察と医療指針」の四つの章としてまとめたものが結果としての本書であろう。本書は月刊誌『透析ケア』に30回に亘り連載したものを中心に、さらに一部を加筆したものである……と「あとがき」にある。つまり、2年を超える連載の中で、積もる思いの丈を存分に展開されたものである。本書の中のいくつかの部分は、すでに月刊誌の中で読ませていただいているが、その時の印象では、重たい主題を取り上げておりながら、幅広い資料を紹介し、古今東西の考え方を示しながら、それをさらりと読ませる文章力に感銘させられた感じであった。

折しもわが国の少子高齢化が一層の現実味を帯び、新規導入される慢性透析患者の平均年齢は67.8歳に達し、30万名を超える透析患者の平均年齢も66.5歳である。透析患者のこのような高齢化を背景に、身体的合併症に加えて認知症などの脳機能異常の合併、さらには回復不能の悪性腫瘍の合併例などが増加していることは、毎日の透析の現場にいれば避けがたい現実である。その結果、「透析継続の差し控え」あるいは「透析療法を選択しない」などの重たいテーマが常時、現実に目の前に出現する状況になりつつある。

このような状況の中で、本年の透析医学会（札幌市）においても、コンセンサスカンファレンス「慢性血液透析の非導入と継続中止に関する提言」が設定されたことはまさにタイムリーな企画であり、著者もそのカンファレンスで講演を行っている。また同じ学会

で著者は「命をどう捉えるか」との特別講演をも行っている。これらの当日に行われた講演の詳細はいずれ学会誌に掲載されることであろう。

本書はそのようなテーマに対する入門書であると同時に、成書であるとも言える。腎不全治療，透析・移

植治療に携わる多くの医療者に対し，まずは身構えずに通読されることをお勧めしたい。

評者 信楽園病院腎臓内科 鈴木正司